

静岡県教育長賞

一人より二人

磐田市立磐田北小学校 三年

相馬 隆之介



今日も学校がおわった。今日もぼくは一人で帰る。ぼくは一人でも平気だ。だって、色々な楽しい事を考えながら自分のペースで帰れるから。でも、だれもないシーンとした道を一人で歩くのは、ちよっぴりこわい。

しょうこう口で上ぐつをぬいでくつをはいたら、後ろの方から、ぼくをよぶ声があった。

「りゅうのすけくん、いっしょに帰ろう。」

その声は、同じクラスのひよりさんだった。ぼくはびっくりし

た。なぜかって、ぼくはほとんどいつも一人だからだ。ほぼ一人ぼっちのぼくに声をかけてくれたから、すぐにうれしい気分にかわって、

(なんてやさしいんだ、かみ様ありがとう。)

と心の中でかんしゃした。

それからいっしょに帰れる日はいっしょに帰った。色々な話をした。家族の事、大すきな虫の事。いっしょにバッタもとった。だれもないシーンとした道もぜんぜんこわくなかった。

本当に楽しかった。

とつてもあつい日がつづく七月のある日、たんにんのまつうら先生がこう言った。

「ひよりさんが、他の学校にてん校する事になりました。」
ガンと心のかねがひくい音で鳴ったような気持ちでした。

(もういっしょに帰れなくなってしまふ。かみ様どうしたらいいの。)

ぼくは、一人は平気だけど二人も楽しかった。ありがとうをつたえたくて、ぼくは一生けんめい手紙を書いた。思い出のバツタやカマキリの絵も入れた。ぼくのせいっぱいのありがとうの気持ちをこめて、一学期さい後の日にわたした。

ひよりさんからしたら、なんでもない事かもしれないけど、ぼくは、その親切な気持ちにゆう気をもらった。自分から声をかける事が苦手なぼくだけど、二期からは、自分から色いろな人に声をかけて、ひよりさんがぼくにしてくれたみたいに、だれか一人でも、温かい気持ちになってくれたらいいと思う。もうすぐ夏休みもおわって二期が始まる。一期のぼくと、二期のぼくは、たぶんきつとちがうと思う。だれもないシーンとした道でも、わらっていると思う。ひよりさん、ありがとう。またいっしょにバツタをつかまえようね。



静岡県教育長賞

小さな親切

静岡市立高松中学校 三年

村松 俊輔



花火を見た帰り道、二歳の弟は母の背中におんぶされたまま眠ってしまった。僕は、弟が落ちないように、そっと弟の背中に手を当てて弟の体を支えた。母は、

「お兄ちゃん、ありがとう。」

と言い、こんな話をしてくれた。それは、僕がまだ母のお腹の中にいる頃の話だった。

出産予定日が一週間ほど先にせまっていたある日、母は一歳の姉をおんぶして散歩に出ていた。ところが、姉は知らないう

ちに寝てしまい、母がそれに気づいた時には、起こしても起きないくらい熟睡していた。ぐらっぐらっその後ろに落ちそうになる姉を、母は必死で支えた。しかし、臨月を迎えた大きなお腹では思うように動けない。しゃがんで降ろそうにも、お腹がじゃまじゃがめないし、前かがみになれば、お腹の重さと背中ののっている姉の重さが一気にこしのしかかる。(どうしよう。もう限界だ。)あせる母の後ろから、小走りで近づく足音がした。「大丈夫？大変ね。」

そう声をかけ、姉をすつと抱きあげてくれた人がいた。

その年配の女性は、母の知らない人だったそうだ。母が困っている様子に気づき、手助けしようとして来てくれたのだ。母は十年以上たった今でも、その優しさが忘れられないと、私に話してくれた。

私はその話を聞いて、心が温かくなるのを感じた。そして、私になげなく弟を支えたこと、だれかを思いやる行動ができたことをほこらしく思った。しかし、同時に（他人に対してと同じようにできるだろうか。）という不安が浮かんだ。相手が見ず知らずの人だったら、私はきっと、声をかけたりできないだろう。（余計なお世話じゃないかな。）とか（めいわくだったらどうしよう。）と考えてしまい、声をかけるのをためらってしまうだろう。今でもそうして見過ごしてきた事がたくさんある。

大雪で急ぎよバスが運休した日、バス停に立っている人を見かけた。運休したことを知らず、バスを待っているかもしれない。「運休ですよ。」と声をかけたいと思った。でも結局、私は声をかけられなかった。その後、（あの人は寒期中、ずっと待っていたんだらうか。）そんな思いがなかなか消えなかった。

花火の帰り道、

（弟がおちないように。母が困らないように。）私はそれだけ

を思った。そして私は自然に弟を支えていた。それが結果的に親切につながるのだ。今まで、心に芽生える親切の芽を自分でつんでいた。私の中に生まれる思いやりや優しさをもつと大切にしたい。自分ができるところをする。そうして小さな親切を実らせていきたいと思う。

